

野菜もよく眠らないとだめ。
夜はまっくらなところぐっすり眠る。
人間だって同じだよ。

が、この部落にあった谷戸車は部落みんなの水車でしてね。順番に朝からあくる日の夜中まで一日中つけるわけ。壊したら自分の責任でもって直す。そんなわけで、農家は自分のところでとれた米は水車で精米していましたよ。水がだんだん汚れてきて米を作らなくなってしまったけど。

野菜もね、夜はしっかり寝なくっちゃあ駄目なんだよ。このあたりも蛍光灯がつくようになって夜昼の区別がなくなっちゃっただろう。狭山じゃあまだ夜はまっくらだから野菜がよく眠る。だからあつちのほうでできがいいわけ。ホウレンソウだって大根だってね。野菜も人間と同じで、完全に睡眠完全によい空気のなかで一日泳いでうまくいくんだ。野菜が寝ないで動いちゃうから、うまく成長しないんだよ。この辺で大根作るとうっかりするとスが入っちゃうことになる。だから町に近いところで農業をやるっていうのは、ほんとうに気を使うむずかしいことなんだよ。



意外なほど農地が広がる



大蔵の五尺藤。見ごろには近所の人のために開放される

新しいみこしはお母さんたちがかつぐ女みこしよ。

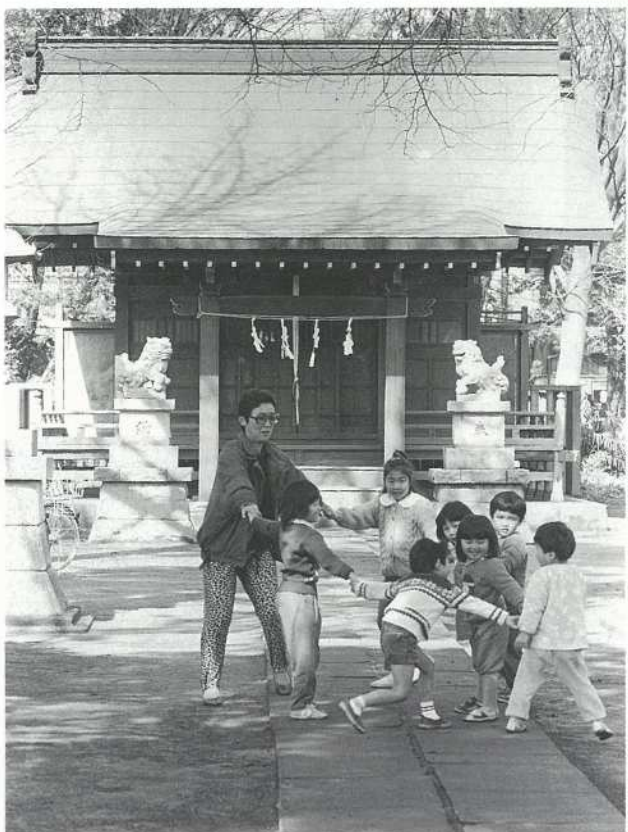
世田谷の農村風景

宇奈根氷川神社

宇奈根ではお祭りがとても盛んになってきました。とてもいいことだと思っています。でも一時は淋しかったんです。みこしをかつぐ子どもも少なくて、かけ声も少ない。みこしがずり落ちそうなんです。主人に聞いたら、あのみこしは自分たちが青年団のとき作った手づくりのみこしだっていうでしょ。それじゃあつて、子どもも会作ってなんか祭りをもう一度盛んにしようって結婚して宇奈根に来て十年くらいでしたか、昭和四十九年の十月です。それから毎月廃品回収を皆さんでして、頑張りました。祭りは昔からのやり方でやらなくてはほんとうとはいえないでしょ。お年寄りの方々にはずいぶんいろいろ教わり助けてもらいました。みんな一丸になったわけ。昔からの大きな大人のみこし、それから手づくりのみこし、廃品回収で作ったみこしとおみこしも三基になって、新しいみこしはここ二年、お母さんたちがかつぐ女みこしになっているんですよ。会の名前は雅会といいます。四、五年前から喜多見の氷川神社のお囃子を若い男性グループが毎週通って習って、今では

子ども達に伝承されて、とてもうれしいことです。宵宮にお囃子が聞こえてきて賑わいがあるってとてもいいですから。

二十年前とくらべて宇奈根の変わったところといえば、緑のなかにだんだんはなやかな色が入ってきたことですね。いままでの農村にはなかった色、



小泉珠子さんと子どもたち



宇奈根の鎮守、氷川神社

緑のなかにだんだんはなやかな色彩が加わってきました。

世田谷まつり今昔

農大収穫祭



▲加藤日出男さんと若い仲間
左隣が加藤氏

▲収穫祭での応援風景

私が提案した「ダイコン踊り」は、今じゃなんてことないのですが、当時は斬新なアイデアとして面白がられましたね。

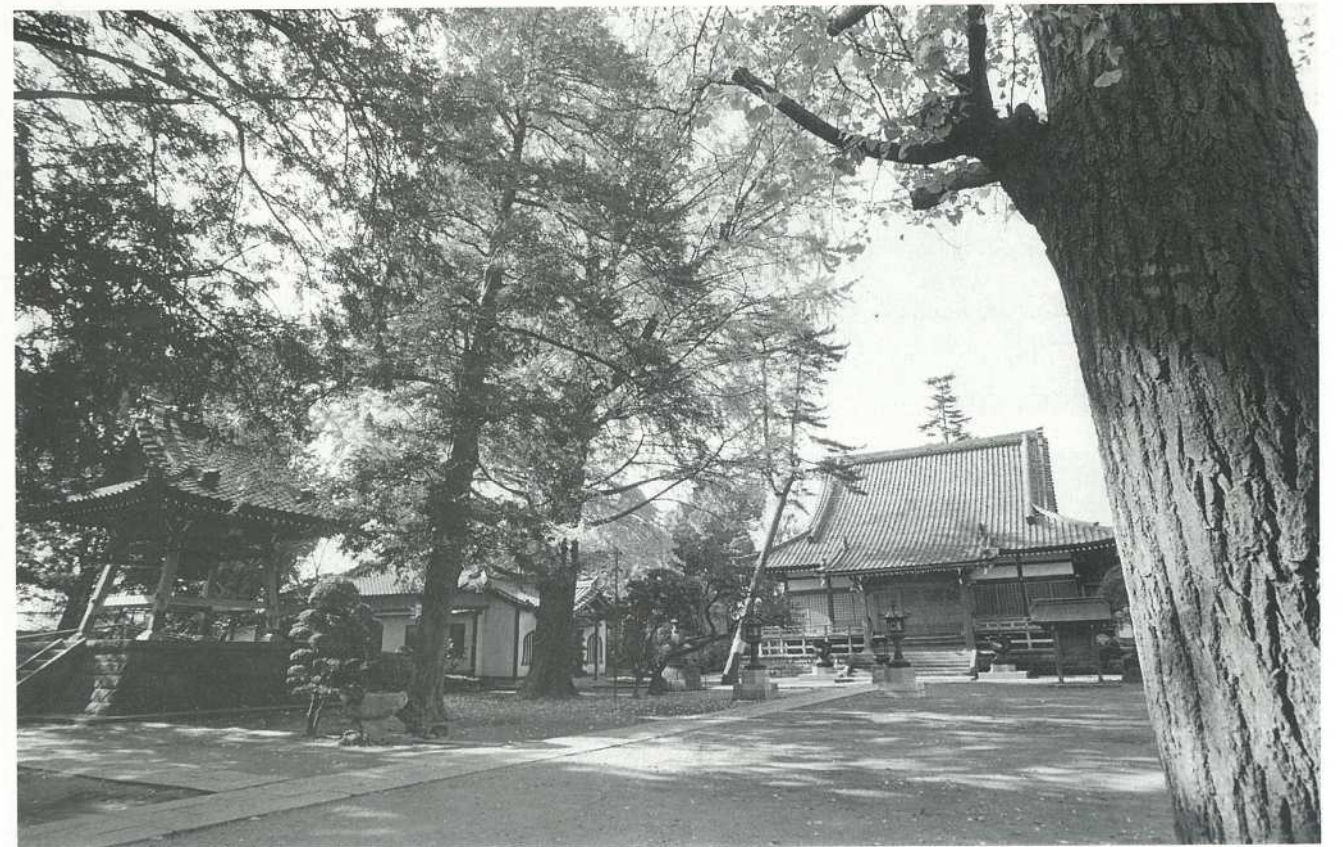
農大といえば、あのダイコン踊りで有名。発案者の加藤日出男さんは昭和二十七年の収穫祭の実行委員長としても活躍された。「祭りは主催するのが一番楽しい。自作自演の楽しさを後輩にも味わってもらいたい」と、加藤さんは、母校農大の収穫祭について熱っぽく語る。

農大ももうすぐ創立百周年ですね。明治の元勳榎本武揚がつくった学校で、昔は青山の常盤松にあったのですよ。私は秋田中学から秋田鉱専（現秋田大学）へ進み、そこを中退して終戦直後に農大に入りました。当時大学はもう世田谷に移っていました、校舎こそ元陸軍自動車学校のものを使っていましたが、土地が六万坪もありましてね。私が収穫祭の副委員長になったのが昭和二十六年、物資が少しずつ出回りはじめた頃ですが、まだ外食券もあった時代です。

まあ、そういう時代背景でしたが、私たちは何とか収穫祭を特色あるものにしたいと思ひまして、五月祭や三田祭を見て回りました。しかし、まだ時代が時代ということで、どの大学も学園祭らしい華やかさはなかったですね。私としては、学園祭というのは学生、教授、職員、父兄、そして地域の人々にも開かれたコミュニケーション活動の一環をなすものではないかと考えたのです。そこで、それじゃ



喜多見にも氷川神社がある



江戸氏の菩提寺、慶元寺

たとえば看板とか屋根の色とか。緑はそんなになくなっていないと思います。古い村の風景と新しく入ってきた人たちが建てた住宅の風景と違いますよね。でもお祭りがあったから、昔からの人と新しく入ってきた人たちの接点がうまくできたんだと思います。裸でぶつかりあうお祭り、心でよろこびあうお祭りってやっぱりいいものですね。お互いの一年間の確かめあいをするんですから。それに、子ども会の活動で皆さん名前知っているでしょう。だからふだんのあいさつもある。今、子ども会によるこんでボランティア参加したださるお母さん方が毎年二〇〇人くらいいますから、地域の問題を話し合うし取り組みもできるんです。

宇奈根って、東名高速と多摩川が出会う角のところに丸い形であるでしょ。細長い土地とは違って真中に立つたら四方が見えるわけ。だから団結もあるんじゃないですか。とてもいいところだと思ひます。世田谷が変わっていくときは、いつでも最後が宇奈根になります。でもあんまり変わらないほうがいいという気持ちが強い。だって、とても住み良いところなんですよ。

神社ってほんとうにすごい力がありますね。氷川神社は戦災で一度焼きました。もとはワラ葺。今もあまり立派じゃあないんですけど。でも宇奈根の人の風景の要なんです。神社が人をひきつけ結びつけてます。お祭りのときしみじみ感じます。

世田谷まつり今昔

しもきた天狗まつり

伝統に新しい文化性と企画性を



大塚弘章さん

天狗の行列、あるいは「福は内、福は内、福は内」と唱え「鬼は外」と言わない豆撒きで知られる「しもきた天狗まつり」は、もともと大雄山真竜寺、通称道了尊の節分会の催

かつて、下北青年協議会のリーダーとして「天狗まつり」を復活させた大塚弘章さんは、下北沢一番街の文具店のご主人。伝統に新しい企画を加え、「しもきたまつり」をさらに大イベントにしたいと夢をふくらませる。

事として行なわれていた「天狗道中」を復活させたお祭りです。天狗道中そのものは、明治初年の頃、原塚山和和尚が十一面観世音を祀り、世の中の邪気を払い、巡錫を修業したことに由来します。

——当地の天狗の行列は昭和四年頃から行なわれ、戦前はかなり遠方まで出かけていましたし、戦中も続けられてきた由緒ある行事でした。ちょうど東京オリンピックの前後から全国的に建設ブームといいますが、ダンブ・トラック優先になり、街中をぞろぞろ歩く行事に警察の許可がおりず、しばらく街頭行列は中止し境内だけで行なわれていたのです。

ところが五十年代になると、歩行者優先の時代になって（笑い）、商店街の青年部（当時の下北青年協議会）で、地域ぐるみのイベントとして天狗の行列を復活させようという声が出て、お寺の賛同も得られたので、五十二年頃に「しもきた天狗まつり」として復活したのです。

古いものを新しくアレンジしてゆくと、それが祭りを成功させるコツですよ。



威勢のよい北沢八幡の秋祭り⑩



世田谷のポロ市⑬



馬事公苑で開かれるサマー世田谷ふるさと区民まつり⑭



世田谷八幡の秋祭りには相撲が奉納される⑩



下北沢と並ぶ下高井戸の阿波おどり⑮



下北沢の阿波おどり⑮



世田谷まつり今昔



経堂の万燈みこし⑯

収穫祭を世田谷の歳時記に

——こんな実績があるものだから、代々の実行委員長が私のところに収穫祭のノウハウを聞きに来るようになり、また講演を頼まれたり。私も毎年参加していますが、変わった点

農大ならではの農産物としてダイコンを配ろうじゃないかと提案し、収穫祭の宣伝隊（昭和二十四年に学外の宣伝パレードが開始されていた）である応援団に用賀農場産のダイコン二千本あまりを渋谷のハチ公前で配ってもらったんです。これが評判になりましてね。当時毎日新聞社が発刊していた「サン・写真新聞」のトップ記事で紹介されました。

——これで勇気づけられ、翌二十七年、私が収穫祭の実行委員長になったとき、それまで素手で踊っていた「青山ほとり」——これは大正時代に生まれた応援歌に素朴な踊りをつけていたのですが——で両手にダイコンを持って踊るアイデアを出しました。今じゃ何てことないのですが、当時としては斬新なアイデア、まさに農大にふさわしいキャラクターとして面白がられてね。やがてこのスタイルは応援団に定着し、昭和三十八年にはNHKテレビにも登場しました。

精神的基盤になっていると思います。

——このように、地域の住民を巻き込むことで、収穫祭が世田谷の歳時記のひとつになれぼと思っています。そのためには、収穫祭を主催する学生、役員だけでなく全学生が、自分たちがやるのだという使命感を持ってほしいですね。祭りというのは、見る側よりも主催者・参加する側のほうが絶対面白いんですから……。祭りに参加して、何かやったという喜び、自作自演の楽しさを味わってほしいですね。こういう体験が卒業後の生活にも役立つのですよ。私がいまの仕事が続いているのも学生時代の経験、自分でやりぬく気持が

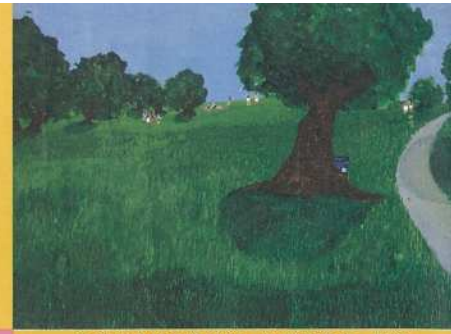
——たとえば、模擬店が増えたことですね。農大の模擬店は、全国の味噌や酒が集まり、圧巻ですよ。なぜかといえば、農大の醸造科には全国の造り酒屋さんの子弟が多いのです。もちろん、酒ばかりではなく、農大の農園でとれた泥のついた野菜をはじめ、全国のうまいものが集まりますから、収穫祭の三日間はショッピングカーをひいた主婦たちが大勢来ましてね。これが収穫祭の良さですね。また、普段ファミコンに熱中している近所の子どもたちがやってきて興味津津という光景もい



玉川小学校6年3組 吉川正彰 57年



桜木中学校3年C組 山田雅之 59年



芦花中学校3年C組 妹尾麻奈美 59年



玉川小学校6年3組 帆足俊寛 57年

子どもたちの原風景

世田谷区の「描画」募集入選作品。
昭和57年度「ふるさと」、58年度「遊び」、
59年度「ひろば」のテーマで募集された。



用賀小学校6年5組 今泉麻子 57年



八幡山小学校1年2組 小橋洋平 58年



旭小学校4年4組 成瀬千栄子 57年



八幡小学校4年1組 森山 賢 59年



八幡山小学校1年2組 小橋洋平 58年



東深沢中学校1年F組 遠藤 薫 57年



尾山台中学校1年E組 増田 晶 59年



駒場東邦中学校2年5組 村瀬晃一 58年



山野小学校3年2組 南部匡彦 57年



尾山台中学校1年E組 増田 晶 59年

世田谷まつり今昔



大天狗④

からす天狗④

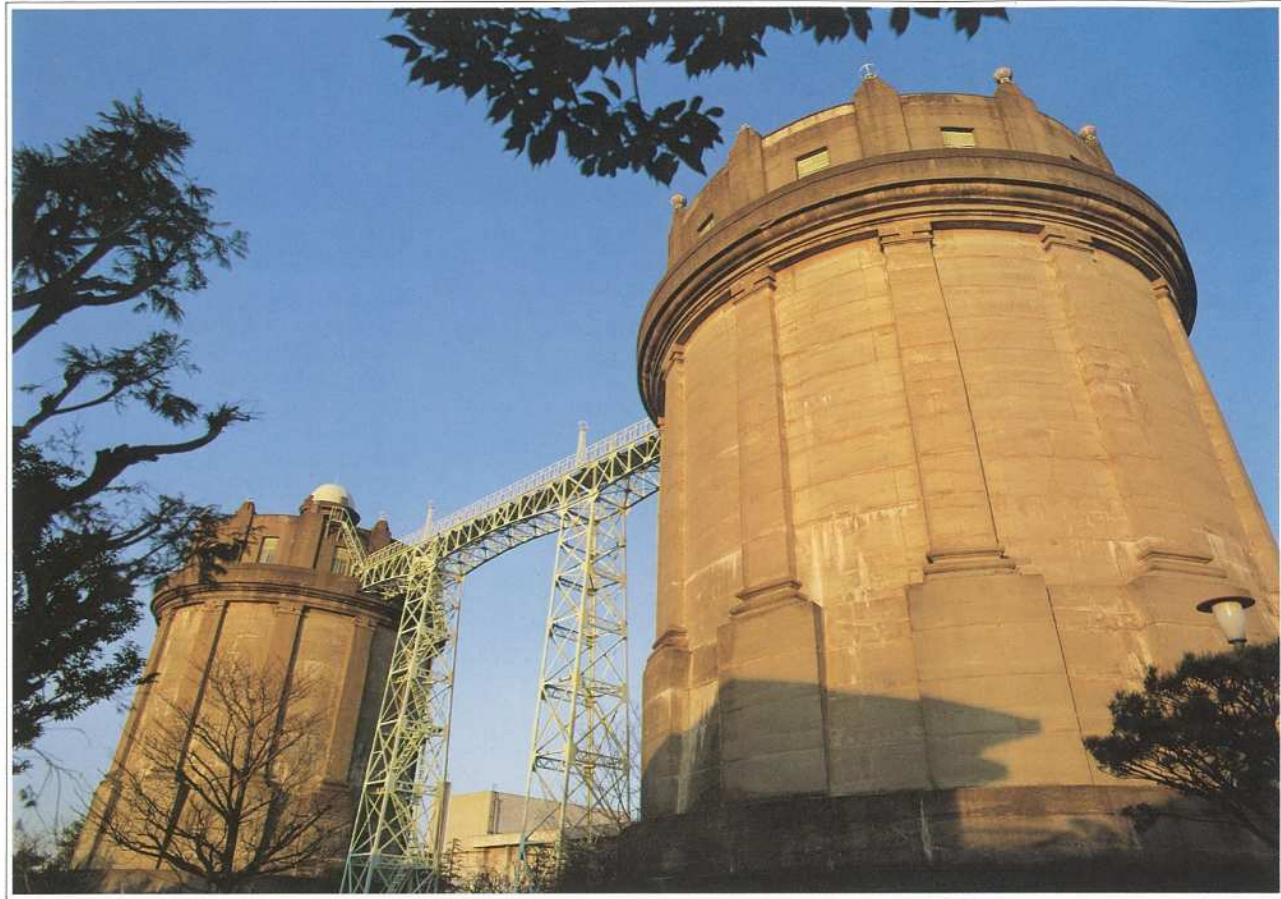


——もともと節分会の催事ですから、毎年節分の前後の金・土・日の三日間をまつり期間とし、下北沢の四商店街ではこの三日間、まつりとあわせて「べらぼう市」と名づけた売出しを企画していますが、これがまた大変好評です。「べらぼう市」とは、文字どおりべらぼうに安いということですが、安売りしようがないというようなお店もいろいろ知恵をしぼりましてね。たとえば、不動産屋さんが「本日の契約料はタダ」とか、床屋さんが「大人一人分でお子さんも」とか、かつては面白

いアイデアもありましたよ。おかげさまで年々人も増え、最近はずっともに歩けないくらいです。

——また、まつり期間には、三年前からPTAや町会の人たちによるチャリティーバザーを中心とした地域住民の手づくりの催し、「しもきたまつり」も行なわれ、こちらも年交流の輪を広げています。今年（六十一年）は本多劇場を借り切り、PTAのコーラスや中学校のプラスチックバンド、音楽グループの演奏会、あるいは小・中学生の作品展を開催し、大成功を収めました。こういう地域住民の自主的な参加が地域文化を育てていくのだと思いますね。

——このように、下北の天狗まつりは、「天狗まつり」と「べらぼう市」「しもきたまつり」が一体となった地域ぐるみの祭典に成長していますが、イベントが成功するかしんないかは、歴史性と文化性、それに新しい企画があるかないかによるとおもいますね。天狗道中は文句なしに歴史のあるものですが、これが、その伝統だけを大事にして境内だけで行なわれていたのではイベントにはなり得なかったと思います。この伝統行事を街中へ出し、伝統に現代的な催しを加えたことが成功したのだと思います。たとえば、天狗道中に加え、ぬいぐるみパレードや「べらぼう市」の実施、そして五十四回を迎えた今年、初めて試みた飲食街の夜の豆撒き、こういう企画があるから人々が集まってくるのですよ。また、「しもきたまつり」のように、地域住民の方がいろいろ催しの企画を工夫されることで文化が根づいてきたのですよ。将来的には、下北の銀行のロビーや劇場全部を使った文化イベントも計画したいですね。



だれもがひとつ、育った場所の

あのまるいのは何だろう。
だれが住んでいるんだろう。
大きさはどのくらいかな。
いったい何でつくってあるのか。
不思議な私たち。

ある日、それがガスタンクだと知った。
すこし大人になってから、
そして見に行った。
はじめて間近に見る。
パンといっぱいにふくらんでツルツルしている。
巨大だ――。

やっぱり。思ってたとおりのんだ。
ひとりでに嬉しくなってしまった。
心にぎざまれている記憶。
だれもがひとつは持っている
風景のなかの宝もの。



風景のなかに宝ものをもっている。

高いところののぼって
遠くをながめるのが好きだった子どものころ。
空との境界線がまちなみのシルエット。
空を海に見たてると、港町。
雲を山に見たてると、どこか知らないよその国。
夕暮れちかく
空の色が刻々と変わるにつれて
いくつにも姿を変えるまちなみ。
それをながめているだけで
たくさん場所を旅することができた。

そのなかで、ひとつだけ忘れられないかたち。
たくさんならんだ、
水色をしたおっぱいみたいなまるいもの。
昼間の陽差しにピカピカひかり
陽が落ちればそこだけ飛び出してみえる。